

第 33 回中国文化セミナー開催報告

「中国文化セミナー」は、日頃中国ビジネスに関与されています皆様、普段とは少し違った視点から中国をご理解いただくことができるよう、中国の文化・伝統・習慣や生活などについて紹介をし、体験いただくことを提案しています。

今年、「横浜中華街の歴史」について、横浜中華街「街づくり」団体連合協議会副会長の曾徳深様に講義をいただきました。

日時：2015年3月17日（火）

場所：菜香新館

講師：曾徳深先生

参加人数：16社、27名



<講師プロフィール>

1940年、横浜中華街に出生。長年華僑の公益事業に携わり、横浜山手中華学園理事長、横浜中華街「街づくり」団体連合協議会副会長・横浜中華街関帝廟理事・横浜天后宮理事として、横浜中華街の街づくりにかかわる。経営する新光貿易株式会社は、業務用ウーロン茶を初めて日本に輸入した先駆け。

<横浜中華街の成り立ち>

1859年、日本に黒船が来て横浜が開港し、外国人居留地を作りました。その居留地の後が中華街で、横浜の地に中華街がある所以です。元々、外国人居留地ということです。

<飲食店について>

戦前、この街は料理屋がたくさんあった訳ではなく、私が名前をあげられるのはせいぜい10軒程度で、全体では20軒位くらいかなと思います。自分が小さい時は、料理屋に行くのは何かおめでたいことがあった時、ハレの日に行くのであって、普段は外食はしない。あの時代は、みんな家庭で自分で食事を作って食べていました。

現在、この街にレストランは約250軒位あります。何故そんなに飲食店が増えたかというところ、戦争が終わった頃、華僑には配給物資がありました。粉と油と砂糖が配給されて、それでドーナツが出来るのです。ミスタードーナツが出来たのはずっと後のことで、私のお店も以前大通りにあった時に、10坪位のほったて小屋の前に火を起こしてドーナツを揚げると、たくさんのお客さんが並びました。食べ物を売ることが商売になるという訳で、そのようなことをする人達が増えて、飲食店として成立していったのです。

<華僑と台湾の関係>

1949年に中華人民共和国が出来た時に台湾との対立がありました。この街にもその影響

が来て、1952年に関帝廟の横にある学校を巡って二つに割れて、対立する状況が起きました。例えば、道路を整備したり下水を直すなどの話し合いも中々進めることが出来ませんでした。南門シルクロードという道路をつくる時も、いざ工事が始まって出来上がってから反対する人がいて、裁判になりました。こちらと話をつけたらこちらは反対するといった具合で、行政もこの街はリスクイという事で、1945～1993年の48年間、行政も何か手当をしたくても出来ない状況でした。

ところが、1993年に27の街づくりの団体の内24の団体が集まって、街のことを色々話し合いながら決めていきたいと思いますということになり、そこから一気に整備が進むようになりました。今日このような形になっているのは、その結果なのです。



<現在の横浜中華街>

飲食店は、食いっぱぐれない商売でもありますが、大儲けが出来る商売でもありません。FLコスト（F：フード＝材料費、L：レイバー＝人件費）という言葉があり、6割を超えると儲かりません。

今では、子供には良い教育をどんどん受けさせます。私達の時代は中国籍ということで就職が出来ませんでした。今は一般企業に

就職出来ます。中華学校では中国語と日本語の両方を教えますので、二つの言葉がわかるのです。小学校では7割中国語を使って、3割は日本語を使います。中学校になると、3割が中国語で7割が日本語になります。日本の教育を受けているので、日本の企業としても役に立つので普通に就職が出来ます。そうすると、子供達が飲食店を継ぐために戻ってきません。今この街は他人に代替わりをしています。どのような人かという、ニューカマーに代わってきています。

ニューカマーには2種類あって、大学を出たグループと中学・高校出のグループとに分かれています。高学歴の人々は日本で起業をします。もう一方は、体力勝負の人々で、このような人達はこの街に来てまず皿洗いをやって、少しコックの見習いをして独立します。とてもバイタリティーがあります。

ところが、我々オールドカマーの子供達は日本の生活に慣れてしまっているのです、なかなかそういった風にはなりません。この街もじわじわとそのような変化が起きています。

講義に続いて質疑応答が行われましたが、予定時間を超えて質問がなされるほどで、曾先生にも丁寧にお答えいただきました。

講演内容、質疑応答の詳細並びに懇親会での料理の紹介等は、会報誌 No.215号（5・6月号）に掲載しています。